

「竹工芸名品展」ニユーヨークのアビー・コレクション——メトロポリタン美術館所蔵

会期：二〇一九年九月十一日—十二月八日 会場：工芸館

素材としての竹

山岸義浩氏に聞く

「竹工芸名品展」の出品作家である四代田辺竹雲齋氏は、竹を自在に組んだ構造体で、有機的なフォルムが意思を持って建物を侵食するかのような巨大インスタレーションを展開している。展示が終わると、解体された竹材の大部分は別のインスタレーションで再び利用される。田辺氏が用いている竹は、虎のような独特の斑紋のある「土佐虎斑竹」で、高知県須崎市の限られた地域で育った竹にのみ美しい模様が現れるという。本稿では、その虎斑竹(虎竹)を中心に竹材の販売・製造を行う山岸義浩氏(「竹虎」四代目社長)に、竹をめぐる現在の状況をお話しいただいた。

——プラスチックのような新素材が次々に開発され、竹が身近なものという感覚は薄れているように感じます。

竹はたった三年で素材としてまた使えるようになるほど成長が早く、継続利用が可能天然資源です。その種類は日本だけでも六〇〇種とも言われ、主たる竹材は孟宗竹と真竹と淡竹の三大有用竹。軽いだけでなく直進性と柔軟性を併せ持つので、加工性が高く、衣食住すべての面で日本人の生活になくてはならない存在でした。

ここ数十年のあいだで、竹は忘れられてきたと思います。森林王国と言われるほど森林面積



虎竹

の広い日本ですが、竹林はそのうちのわずか〇・六パーセント。竹は人が必要に応じて生活圏の近くに植えて増やしてきたので多くに見えますが、面積としては広くありません。つまり、竹が生えていたところには、近くに必ず人が住んでいたのです。縄文時代の遺跡からも竹籠が発見されるように、竹は数千年前から日本人の生活を助けるだけでなく、食料として、また防災のためにも不可欠だったのです。幼い頃から「地震の時は竹林に逃げろ」と習ってきました。竹は天然の鉄筋コンクリートと言われるほど、縦横無尽に根を張ってしっかりと土をホールドします。しかし放置された竹林では、「浮き根」と言って根が生えすぎて深くまで張れません。最近の豪雨で竹林の山に土砂崩れが多いのはそのせいです。昔は護岸のために川に沿って竹を植えていました。たとえば株立ちで育つ南方系の蓬萊竹は、畑や家まで広がらないので重宝され、豪雨被害の多い高知では山の境界線や流れの早い川の曲がり角に使われてきました。飛行機で上空から見ると、関東でも氾濫の危険が大きい曲がりくねった川ほど、周りに竹が植えられているのがわかります。それは誰かが命を守るために植えたのです。竹がどれほど人や財産を守ってきたか、と思います。

孟宗竹の竹林が放置され、周囲の植生を破壊する「竹害」が問題になっていますが、それは竹が悪いのではなく、間伐せずに管理を放棄した人間のせいです。虎竹の里は一般の登山道でもないのに、江戸時代からずっと毛細血管のようにたくさんの道がのびています。アスファルトと違い、山道は一年手入れしないで草木が生え放題になり、雨が降れば鉄砲水ですぐに地面が崩れます。道があるのは、うちの父もその先代も同じところを通って虎竹を採ってきたという証、これはすごいことです。

——竹は道具以外の使い道も幅広いですね。

たとえば京都にはたくさん竹の竹林がありますが、あれはほとんど筍のための「畑」です。その場合は、筍に日光を当てないと育たないので竹を間引きします。竹林とはいえ、逆に竹の葉が繁っていると困るので竹の先端を切ってしまうのです。もうひとつが、竹林をそのまま観賞用に手入れした「庭」としての竹林。竹材を採るための竹林とは異なります。しかし私のいる高知県も含め、山深い場所の竹林はほとんど放置されています。それは日本で竹製品の需要がなくなってしまうから。昔は農作業の道具や壁竹に使われましたが、今は外国から安く輸入され、国産の竹が使われることはまずありません。建築資材としての竹も海外からの安い輸入品に頼っています。食用の筍のための竹林

はまだありますが、作家や職人が竹工芸などに使う量はごくわずかなので、竹材のために管理された竹林はほぼ残っていません。

—— 虎斑竹（虎竹）について教えてください。

虎斑竹は植物学者の牧野富太郎博士が命名したものです。不思議なことに他の場所に移植しても虎模様が出ず、高知県須崎市でもわずか間口一・五キロメートルという狭い谷間でしかうまく成育しません。初代の曾祖父は、一八九四年に大阪で竹材商を始めました。太平洋戦争で大阪の竹工場が焼け野原になり、二代が母方の実家のあった安和（現在の高知県須崎市）で再出発し、戦後に今の会社を作りました。私は虎竹に惹かれるというより、生まれた時から虎模様のあるものが竹だと思っていて育ちました。この独特の模様は土中の特殊な細菌のせいとも言われますが、潮風や気候など様々な要因が影響します。近年の温暖化の影響か、色づきが悪くなってきたことが心配です。

—— 竹の良し悪しは、人の目で見分けるのですか。

小規模ですが、今も職人の目利きで採ります。私が扱う虎竹について言えば、竹屋自体がもうほとんどおらず、生産量もここ三十年で圧倒的に減っています。最大の理由は、需要の減少。使い手がいなければ作り手も減り、作り手のための材料屋も売れないので食べていけない、すると山の伐り手もいなくなつて、また生産量が落ちてくる……ということ。竹はたくさん採れるのですが、色のいい虎竹は年々減っています。つまり、歩留まりが悪くなる。それでも竹林の山を維持するために、売り物にならない竹であっても伐つて山出ししなければなりません。色づきの良くない竹を間引きながら伐るので労力は減らず、売れないのがわかっていても山から竹を下ろさないといけない、厳しい状況です。



山出しの様子

「旬の良い竹」、「旬の悪い竹」と言うのですが、伐採時期によって竹は虫やカビがつきやすくなります。最適なのは秋から冬で、私のところでは伐るのは一月末までという厳格なルールがあります。それから模様、太さ、傷などによって選別をし、その後、油抜きや矯め直しなどの製竹作業を行います。竹を伐つて終わり、ではないのです。虎竹は淡竹の仲間なので表面に白く蠟をふいたような層があり、そのままでは模様ははっきりしません。バーナーで油抜きすると竹に含まれる油分が吹き出してきてようやく斑紋が現れます。取引時はまた油抜きをしていないので、その状態で竹の良し悪しを見分けるには長年の経験が必要です。

—— 四代田辺竹雲齋氏のインスタレーションは、すべて虎竹で作られていますね。独特の模様や他の土地では育たない神秘性に惹かれて虎竹を使い始めたと聞いています。二〇〇〇年に初めて山岸さんの竹林を訪ねられたとか。

それ以前から田辺さんのことは知っていましたが、虎竹を実際に見に来られて。わざわざ竹林に足を運ぶ方は少ないので竹への愛情を感じました。それからインスタレーションに使う竹は少なくていいです。初めて拝見したのが二〇一二年、正木美術館での《天と地》だったと思います。竹が一番美しいと思うのは、やはり竹林の姿。竹が製品になった後も、竹そのままの美しさを思い浮かべられるものが私は好きです。

—— 近年、海外で竹工芸が注目される背景にも、共通する感覚があるように思います。竹が自生しないヨーロッパやアメリカでは、日本やアジアを想起させる竹林のイメージが常に作品と重なっているのでは。

そうかもしれません。ですが、日本の竹は日本人にその価値を認められ、手に取って使ってもらってこそ意味があると思います。生まれ持った感性が備わっているのかと思うほど、日本人は若い人でも竹を見る厳しい目を持っていると感じます。竹は神事など神聖な道具としても用いられますが、脱穀に使う箕など農具や台所用具といったありとあらゆる場面で使われてきました。箕はあれほど美しい形なのに作り手の名前は決して出てこない、光が当たってこなかったという歴史も忘れてはいけません。海外でアートとして評価されるのは素晴らしいことです。それと同時に、日本でも再び竹に目を向けてもらえる機会が増えればと願っています。

（文責・構成：工芸課主任研究員 中尾優衣）